

「終わりの徴」の全てが起こるまで滅びない「この世代」とは何ですか

「はっきり言うておく。これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」(24:34,35 新共同訳)

新共同訳では「滅びる」と訳されていますが、(ギ語：パレルコーマイ) 同じ単語がマタイ5：18では「消え去る」と訳されています。

「消え去る」とは何を意味するのでしょうか。

現在の「天と地」に関して、ペテロはこう記しています。

「今ある天と地は火のために蓄え置かれており、不敬虔な人々の裁きと滅びの日まで留め置かれているのです。…そのとき天は鋭い音とともに過ぎ去り、諸要素は極度に熱して溶解し、地とその中の業とはあらわにされるでしょう。これらのものはこうしてことごとく溶解するのです…」(ペテロ第二 3:7 - 11 新世界訳)

新共同訳が(ギ語：パレルコーマイ)を「滅びる」と訳しているのは、この記述を反映しているのかもしれませんが。

いずれも、これらの使用例では「パレルコーマイ」の語は、他のものに変化するすることや、移行する事ではなく、完全な消失、消滅を意味する事が分かります。

さて、このマタイの記述にある3つの要素がそもそも、消え去るのかそうでないのかを確認しておきたいと思います。

まず「私の言葉」、これは無条件で決して消え去りません。

この言葉が成就された後でもあってもそれは変わりません。

次に「天地」ですが、記述には何も条件は付されてはいませんが、ともかくそれは、今の所ずっと存在していますので、やはり、それが消え去るのは、「この言葉が成就された時点に」という条件付きであると言えます。しかし、それは、ペテロの記述からも分かるようにことごとく消え去ります。

では、「この時代」はどうでしょうか。(「天地」と共に) 結局消え去るのでしょうか。それとも(「私の言葉」と同じく) 決して消え去らないのでしょうか。答えは明らかです。

それは消え去ります。

条件は「これらのことがみな起こるまで」です。「まで」ということはつまり「これらのことがみな起き」たなら、消え去ることになります。

では、この預言が成就した時、消え去る「時代」もしくは「世代」(ギ語:ゲネア) とは何でしょうか。

この「終わり」の預言が成就する時は、救われる人、滅ぼされる人の分離がなされる時でもあります。

もし、この「ゲネア」を「世代」と訳し、(それが誰を指すかはともかく) その時の「人々」を指すとすれば、それは「消え去る」のですから全員が滅ぼされねばなりません。

しかし、これらの言葉は「弟子たち」に語られています。そして、この直前の言葉は「あなたがたは、これらすべてのことを見たなら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。」です。

ルカの 21 章の方の記述もほとんど同一の記述がありますが、3 節前の 21 : 28 では「このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の時が近いからだ。」と述べて、あなた方の救いが近づいたことを悟るようにと励ましています。

文脈から言って、この言葉が突然に、クリスチャンを完全に度外視した、「滅ぼされる」(消し去られる)人々だけを対象にしたものと捉える事は無理があるでしょう。

むしろ、依然、文脈のまま、救われるクリスチャンを対象に励ます言葉と捉える方が理に適っていると思います。

であれば、「これらのことがみな起こった」後、消え去る事になっている「このゲネア」は人々を指すのではなく「時代」つまり「艱難時代」がすべて消え去るという意味に違いありません。

ですから、ここでは、「ギ語:ゲネア」を「世代」ではなく「時代」と訳す方が的確であると言えます。

さて、では、「この時代」についての記述は、文脈の中の何を指しているのでしょうか。

その「時代」は、どれほどの期間になるのでしょうか。

イエスはダニエル書に書かれている「憎むべき破壊者」に言及しておられます。

ダニエル書を読むならば、この者が 70 週の最後の 1 週の時に現れるものであり、その半ばに犠牲を廃止する、これは 4 頭の最後の獣による 3 時半の、聖徒迫害の時であることが分かります。そしてそれは、マタイ 24 : 9 の「そのとき、あなたがたは苦しみを受け・・・」以降の記述と合致することは明白です。

つまり、「世界の初めから今までなく、今後も決してないほどの大きな苦難」(24 : 21) と表現される 1260 日の大患難の出来事と、その直後の「その苦難の日々の後、たちまち太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は空から落ち、天体は揺り動かされる。」(24 : 29) の出来事(これは黙示録の記述から(大バビロンの滅びを意味していることが分かります))

そしてさらに続く、「そのとき、人の子の徴が天に現れる。そして、そのとき、地上のすべての民族は悲しみ、人の子が大いなる力と栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見る。」(24 : 30) というキリストの臨在と異邦人の裁きが続きます。

これら全てを合わせても、ダニエル 12 : 11 に示されている、「日ごとの供え物が廃止され、憎むべき荒廃をもたらすものが立てられてから、千二百九十日が定められている。」という記述にあるように、3 年 6 ヶ月の間の出来事です。

「山に逃げ始める」合図となる徴から数えてもわずか 7 年間の出来事です。

さて、これが「これらのことがみな起こるまで」という表現に含まれる「全てのこと」と言うことができるのでしょうか。

話しを元に戻しますが、3 年数ヶ月、或いは長くても 7 年間の出来事を「この時代」と表現すると思われるのでしょうか。

無論「7 年間」を「時代」と表現してはならないと断言する根拠はないですが、通常「時代」という表現は「人間の寿命」と無関係ではないという暗黙の了解があると思います。

日本語で言えば「先祖代々」の代であり、「一世一代」の代です。どんなに短くても数十年という感覚は、時代や国が変わっても共通した感覚だと思われます。

ここに何気なく「時代や国」という言葉を使ってしまったが、これが、長い分には、かなり巾があるようです。

江戸時代、戦国時代、石器時代などの表現がありますが、「この時代」（今の時代）という場合、人の寿命（+α）くらいが妥当と思います。

そうであるとする、この「これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。」という表現は、「終わりはまだ」であり「生みの苦しみの始まり」と述べられた際に言及した出来事の期間をも含むにちがいありません。

これらの事を考量すると、おおよそ「人の寿命」（数十年から百年前後）の間、産みの痛み（陣痛の初期； 24:8で産みの痛みと訳されている原語は「オーディーン」で、女性形の名詞で、陣痛、出産の激痛を意味する語が使われています。）から、次第にエスカレートし、その誕生間際のピークである大患難までの間の出来事が生じる期間を「この時代」と表現しているのかもしれませんが。

イエスは、あるところで、クリスチャンに向けられる憎悪と、迫害が終わるときが来る事を、子供を産む女になぞらえてこのように言われています。

「はっきり言うておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。女は子供を産むとき、苦しむものだ。自分の時が来たからである。しかし、子供が生まれると、一人の人間が世に生まれ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない。」（ヨハネ 16:20,21）

艱難を経て救出されたクリスチャンは、その喜びの故にその時、それまでの長く苦しい時代は「消え去って」ことを知り、もはや「思い出すこともない」ほど完璧に「この時代」は「滅びる」ことになるということでしょう。

結論：

ものみの塔の正式教理では、この「世代」は統治体を含む「油注がれた者たち」であるとしています。「つまり「これらのすべての事が起こるまで、「油注がれた者たち」は決して過ぎ去りません。」「統治体」が完全に滅びるのは、全ての出来事が起きた後であるということです。

「今ある天と地は火のために蓄え置かれて」いるのと同じように「この世代」も「火のために蓄え置かれて」います。知らず知らずのうちに自分たちの滅びを堂々と言っている「統治体」によるこの「世代」の教理は、彼らの潜在意識のなせる業なのか、はたまた神の摂理なのか分かりませんが。この教理だけは「真実」のこととして彼らに臨むことは確かでしょう。

しかし、聖書的には「世代」が「人々」を指すということは、ありえません。

それは、産みの苦しみの「時代」を意味しています。